中島敦「文字禍」の世界

新井通郎

一

中島敦「文字禍」は、『古譚』と題してまとめられた四篇（「狐憑」「木乃伊」「文字禍」「山月記」）のうちの一つである。「文字禍」は、「狐憑」「木乃伊」に先行して、「山月記」とともに『古譚』の総題のもと『文學界』第九巻第二号（一九四二〔昭和一七〕年二月／一四四～一五二頁）に発表された。その後、『古譚』四篇として、第一創作集『光と風と夢』（一九四二〔昭和一七〕年七月／筑摩書房）に収められた作品である。

「文字禍」と「山月記」がなぜ「狐憑」や「木乃伊」に先行して発表されたのか。中島敦は南洋庁に赴任前（一九四一年六月二八日）に、深田久彌のもとへ『古譚』四篇を託して帰宅している。『文學界』の当時の編集であった河上徹太郎に、『古譚』四篇の掲載が不可能ならばそのうちの若干でも掲載してくれるよう頼み、託した作品のうち深田久彌がすぐれていると判断した二作品が、『文學界』に掲載されることになったのである。(1)

『古譚』総論や「山月記」に関する論稿は、数多く見ることができる。しかしながら、「山月記」を除く『古譚』各篇の単体の論稿は決して多くはない。『古譚』総論研究を行うためには、『古譚』四篇の綿密な考察分析に基づく各論が必要である。そして、『古譚』という範疇での総論研究へ結実させるべきだと考える。『古譚』四篇のどの作品も、蔑ろにしてはいけないのである。本稿では、『古譚』研究への足がかりとして、『古譚』という枠組みを外し、「文字禍」単体を対象として言及する。

二

中島敦「文字禍」に関する先行研究を概観する。

佐々木充氏[2]は、「文字禍」では「言霊思想の発生する過程を描き」、「永遠・不滅という人間を超える世界のものとして」〈文字・言葉〉がある作品として描かれているとしている。奥野政元氏[3]は、文字の霊とエリバ博士のかかわりにおいて、「一般的で普遍的な対象であった文字の霊が、次第に自己の存在にかかわる問題として自覚されてくる過程」が描かれているとしている。「自己」の問題に着目し、示唆に富む指摘である。宮田一生氏[4]は、「『文字』から『文字禍』への変更は、テーマ小説から「譚」的世界への移行であ」るとし、「中島は「歴史」とは何か」という命題を捨てて、文字の霊の存在を問う、という極めてユニークな世界を構築してゆく」とまとめている。宮田一生氏のいう「「譚」的世界」とはいかなるものであるのか、具体的に示されておらず、わからないのが残念である。小沢秋広氏[5]は、「『文字禍』の主題が「歴史」のかたわらに取り残されるものへの視線」であると述べている。秋元誠氏[6]は、「文字禍」と「文字」の相違点について考え、「文字禍」において、「分析病」について付加した点が重要であるとしている。そして、「文字禍」の主題は、「「存在の不確かさへの不安」にある」とし、中島が「文字禍」を創作することで、「「形而上学的迷朦」を文学的に形象化して昇華を目指」したと考えている。戸塚安津子氏[7]は、草稿との比較を通し、「①ページ数が少なくなり②登場人物の数が減り③時間・場所・主人公に〈動き〉が出④観念的なテーマが隠された、という結末」を導き、「エリバ博士個人の問題が主題」であり、「中島敦の作家人生を通しての問題を、物語の位置要素ではなく、その形態まで含めた物語全体で表した作品」が「文字禍」であるとしている。中島甲臣氏[8]は、「文字禍」を、「分解癖（存在の不確かさ）と、感覚と観念の認識論的対比、の変形である行動と観念の対比、が核になって形成された作品」と規定している。また「文字禍」における歴史談義は、「作品全体の終結とは無関係であ」り、「歴史談義を組み込むこと自体に無理があった」のではないかと、指摘している点は興味深い指摘である。勝又志保氏[9]は、時代的コンテクストに着目し、「『文字禍』は戦時中の言論弾圧・思想弾圧のパロディーにほかならない」と結論付け

ている。勝又志保氏の述べるような、そこまでの時代批判が「文字禍」に含まれているのか疑問が残る一方、ソシュール理論との類似性の指摘といった興味深い指摘もなされている。安福智行氏[10]は、「文字禍」の成立過程に着目し、論じている。「ノート第三」[11]「ノート第六」[12]などをもとに、『History of Assyria』や『The Civilization of Babylonia and Assyria』と、「文字」「文字禍」の関係を説明している。資料との比較から導き出した事実のみの報告が中心であり、そこから導き出した問題点や意義がないことが惜しまれる。奴田原諭氏[13]は、「「文字の霊」は存在するか否か、という問いに〈憑かれた者〉」であるエリバ博士は、「一つのモデルとして〈憑かれた者〉、病的なまでに一つのことに熱狂している者の姿を見」、「その者を基準として自らを相対化し得る」としている。「文字禍」において書き手が、「〈憑かれる〉ことに対しての相対化を試みた」ものとして位置付けている。諸坂成利氏[14]は、比較文学の立場からボルヘスとの比較を行っている。

先行研究を概観してみると、草稿「文字」と「文字禍」との間にある問題をどのように考察すべきか、それぞれの論稿で意見が分かれている。また、「文字禍」の位置づけをどのように導き結論づけるかが、大きな問題といえよう。つまり、「文字禍」の複雑な構造をどのように捉えるか。座標軸、視点をどこにおくべきか。「文字禍」を論じる上で明確にしなければ、作品を捉えることは困難であろう。

本稿では、「文字の霊」に関する記述、エリバ博士の描写や研究を追いながら、「歴史とは何か？」という疑問、禍とはいかなるものであったのかを考察する。そして、「文字禍」に描かれる〈文字禍〉とは何であるかという一つの結論へと結実させていく。

三

中島敦「文字禍」内部を考察していく。中島の残したノートや手帳を頼りにすれば、「文字禍」の素材として『History of Assyria』や『The Civilization of Babylonia and Assyria』を挙げることができるだろう。[15]「文字禍」と『History of Assyria』や『The Civilization of Babylonia and Assyria』との関係に関する考察は、安福智行氏[16]の論稿において、表現の類似関係等詳述されているので、本稿では、改めて言及しない。しかし、安福智行氏の論稿において、『History of Assyria』や『The Civilization of Babylonia and Assyria』が「文字禍」の作品構造にどのような作用を及ぼしているのか、取捨選択の過程への言及がほとんどない。「文字禍」と素材との関係を明確にするためには、表現の一つ一つを照らし合わせていくことが必要となる。また、プラトンの『パイドロス』や『国家』との関係、ソシュールとの関係、「文字禍」の舞台となっている時代の歴史事実との関係など、「文字禍」と素材との関係は、考察すべき点が多い。この点に関する言及は、今後の課題としたい。

「文字禍」内部を分析するにあたり、「文字の霊に関する問題」、「歴史への問いと文字の霊の関わり」、「エリバ博士への文字の霊の禍」とに分けて考察していく。「文字禍」における「文字の霊」とはいかなるものであるのか。「文字の霊」に焦点をあてることで、エリバ博士ら登場人物の変化も捉えることができるのではないかと考える。

第一に、「文字の霊に関する問題」を考察する。「文字禍」冒頭は次のように始まる。

文字の霊などといふものが、一體、あるものか、どうか。　（三〇頁）

「文字の霊」の存在に対する疑問から始まる。「文字禍」の冒頭は、最初に舞台や登場人物といったトポスに関することを中心に描く『古譚』の他三篇と異なり、問題提起から始まる。中島の冒頭の常套から考えれば、破調といえる

冒頭である。しかし、単純かつ明快な説明による冒頭でなくとも、「文字禍」が「文字の靈」の問題を中心に話が進んでいくことを否応無しに読み手に了承させている。問題提起から始めることで読み手に与える冒頭におけるインパクトは大きい。冒頭において、舞台や主人公に関する情報はまだ提示されていない。「文字の靈」に関する情報だけである。「文字禍」においては、常に「文字の靈」に関する情報が先行して読み手に提示されていく。「文字の靈」とは、存在するものなのか、「文字の靈」とはいかなるものなのかという読み手の疑問をもたせた中、次のような表現がある。

アッシリヤ人は無數の精靈を知つてゐる。夜、闇の中を跳梁するリル、その雌のリリツ、疫病をふり撒くナムタル、死者の靈エティンム、誘拐者ラバス等、數知れぬ惡靈共がアッシリヤの空に充ち滿ちてゐる。しかし、文字の精靈に就いては、まだ誰も聞いたことがない。（三〇頁）

「文字禍」内部において、「文字の靈」に関する情報は、全くわからない状況にあることがわかる。これから解明していくべき問題として、「文字の靈」の問題が設定されている。またここで、「文字禍」の舞台が、古代オリエント最初の統一国家であるアッシリアであることを提示している。アッシリアでは、「靈」というものを一般的に認識する土壌がある。「靈」という不確かな存在を認める舞台の中で、不確かなものを追い求めていく。しかし、そもそも「靈」がしゃべることができるものであるか、明確にされていない。さらに、「靈」を実際に見た者の描写、「靈」というものの実体が全くわからないまま展開していく。「文字禍」は、捉えることが困難な抽象概念に対する問題が中心に進められている。

なぜ、「文字の靈」の存在の有無を問うことになったのだろうか。一つの噂に起因する。「毎夜、圖書館の闇の中で、ひそ〳〵と怪しい話し聲がする」という噂が立つ。噂というあいまいなことが、「文字の靈」の研究を命じる契機と

なっている。噂という不確かな情報が、あたかも真実であるかのごとく扱われている。疑うことが全くない。このようなことがまかり通る舞台なのである。そして、「どうしても何かの精霊どもの話し聲に違ひない。」と安易に精霊の話し声であるという判断へと移行していく。考え得るものを探す中で、「書物共或いは文字共の話し聲と考へる」ほかないとなっていく。舞台において、これらに疑義を唱える者がおらず、この意見が受容されていく。噂が精霊どもの仕業であろうという推測が、「文字の靈」に関する問いを生じさせている。書物あるいは文字の話し声であろうという安易な発想を、誰も疑うことなく受容できる環境下に「文字禍」の世界があるといえる。エリバ博士は、曖昧な噂がことの発端で、曖昧な存在を追求しなければならないことになんの疑義を持っていない。これこそ「文字禍」世界の実情をあらわしているといえる。

噂の原因が精霊の仕業であろうという推測により、エリバ博士の「文字の靈」に関する研究を行う契機となっている。不確かな噂が契機となり、ストーリーが展開する。「狐憑」におけるシャクに憑きものがついたという噂や、「木乃伊」におけるパリスカスの夢想が契機になってストーリーが展開されるように、真実性の希薄なことをもとに展開していく。『古譚』における常套手段ということができる。作品の読み手は、主人公が信憑性のないものを追い求めることを了承している。決して主人公が達成できぬ運命であろうとも、読み手は受容することができる。抽象概念を軸に展開することで、作品の構造は複雑になっている。しかし、難解さの中に、主人公の教訓染みた結末を設定することで、読み手を惹きつけているのではないか。それが、「文字禍」ひいては『古譚』の魅力なのではないだろうか。

アシュル・バニ・アパル大王の命令により、「文字の靈」について、エリバ博士は研究し始める。研究として、日々、粘土板の書物と格闘している。努力をしていても、「文字はボルシッパなるナブウの神の司り給ふ所とより外には何事も記されてゐない」と、「文字の靈」に関してわからない。研究の初歩の段階で、書物による「文字の靈」

研究の限界を迎える。研究の初歩の段階において、エリバ博士は、実際に図書館で怪しい話し声がするのかどうか、自分自身で確かめることなく、書物から「文字の靈」の研究に取り組んでおり、噂の実体を明らかにしようとはしていない。エリバ博士は具体的に体感していない存在を追い求めているのである。また、「文字の靈」を探るのに、その探る文字から見出そうとする。エリバ博士は、具体的にどのようなものであるかをわからないものを、探るものを頼りに探る。客観的に見れば、極めて滑稽な場面である。エリバ博士自身が、未知なるものを追い求める方法が、文字からしかない。言われたことを受容するのみで、疑義を見出すことができない存在なのである。

エリバ博士は、「博士は書物を離れ、唯一つの文字を前に、終日それと睨めつこをして過した」と、書物から離れる決心をする。その結果、エリバ博士は、次のような文字の解体を見る。

一つの文字を長く見詰めてゐる中に、何時しか其の文字が解體して、意味の無い一つ一つの線の交錯としか見えなくなつて來る。單なる線の集りが、何故、さういふ音とさういふ意味とを有つことが出來るのか、どうしても解らなくなつて來る。（三二頁）

エリバ博士の感じた感覚は、外国語を見て描かれている線の意味するものがわからない感覚、「文字だったのか？」というような感覚と同様のものであろう。この感覚は母国語をみている時にはまずでてこないであろう発想であり、発想の転換がエリバ博士に発見をさせたといえる。今までわからず、研究のスランプに近い状況であったエリバ博士は、この発見で大きな喜びを得る。エリバ博士にとって、この発見は、まさに偉大なる発見であり、「文字の靈」の存在を認めざるを得ない発見になっている。エリバ博士の「文字の靈」の存在問題に対する結論は次のようにある。

魂によつて統べられない手・脚・頭・爪・腹等が、人間ではないやうに、一つの靈が之を統べるのではなくて、どうして單なる線の集合が、音と意味とを有つことが出來やうか。（三二頁）

文字に意味や音を付加し、定着させたものが、「文字の靈」であるとしている。しかし、事実として、現実として、文字は「靈」により付加されたといえるのだろうか。奥野政元氏[17]は、「分析によっては明らかにし得ないものの存在に霊という言葉を与えた」としている。エリバ博士は、あたかも「文字の靈」がいるものだという状況下で研究を言い渡され、疑うことなく研究してきた。書物からはなんの手がかりも得られず研究の限界の中で発見をしている。短絡的な発想とはいっても、エリバ博士は、「文字の靈」の存在を認めざるを得なかったのではないか。しかしそれは、奥野氏の述べるように、「明らかにし得ないものの存在」を短絡的に認めているに過ぎないのである。ないものをないと立証することは極めて難しい。エリバ博士はあせりと不安の中、「文字の靈」が存在するものと短絡的に決定付けざるを得なかったのである。ゆえに、エリバ博士の「文字の靈」が存在するという結論は、全くもって実証性がなく結論付けられる。実際に「文字の靈」が存在するのか、「文字禍」世界からはわからない。「靈」の仕業であろうという先入観が、「文字の靈」の存在を作り上げ、エリバ博士に追い求めさせている。実際、噂にある話し声の正体が「文字の靈」であるとは描かれていない。「文字の靈」が話すことができる存在であるのかもわからないままである。エリバ博士は噂の解明につながる結論は何一つ見出せていないのである。

エリバ博士は、「文字の靈」がいるという短絡的な結論をもって、「文字の靈」とはいかなるものかと実証を始めていく。存在の有無を明確にするのであれば、第一に「文字の靈」の存在に対して実証的に行うべきである。確かに、「靈」という存在の不確かなものを扱うことによる問題がある。しかし、エリバ博士の研究は、あまりにも唐突過ぎる印象を受けてしまう。「文字禍」において、「文字の靈」が存在することを確定した上で、実証していく逆の展開になっている印象を受ける。「文字の靈」が存在するという結論を導いた上で、後付けで説明を付加していく。ゆえに、実証とはいっても、次のような偏りのある調査結果として浮かび上がる。

「文字ノ精ガ人間ノ眼ヲ喰ヒアラスコト、猶、蛆虫ガ胡桃ノ固キ殻ヲ穿チテ、中ノ實ヲ巧ニ喰ヒツクスガ如シ」と、ナブ・アヘ・エリバは、新しい粘土の備忘録に誌した。（中略）「文字ノ精ハ人間ノ鼻・咽喉・腹等ヲモ犯スモノノ如シ」と、老博士は又誌した。（中略）ナブ・アヘ・エリバは最後に斯う書かねばならなかつた。「文字ノ害タル、人間ノ頭脳ヲ犯シ、精神ヲ麻痺セシムルニ至ツテ、スナハチ極マル。」（中略）之は統計の明らかに示す所である。　（三二頁）

文字の霊がもたらした害、いわば、〈文字禍〉についてである。確かに、このような〈文字禍〉について研究することは必要なことであり、報告すべき問題だといえるだろう。しかし、「文字の霊」を研究する契機となった図書館でなぜ霊が話をしていたのか、文字の霊は話すことができるのか、といった言及は全くされていない。「文字の霊」に対する根本的な問題の解決は見られない。エリバ博士にとって、このような根本的な問題は追求すべき問題となっていないのである。

〈文字禍〉に対するエリバ博士の調査結果は、恣意的な結果である。「文字の霊」の一側面しか述べられていない。文字による利便性は全く排除され、害とされる部分のみをクローズアップしているのだ。エリバ博士の行動のすべてが先入観から短絡的に結びついている。それが「文字禍」の世界なのである。

エリバ博士は、「文字の霊」に対する調査結果より発展した考えとして、「埃及人は、ある物の影を、其の物の魂の一部と見做してゐるやうだが、文字は、その影のやうなものではないのか。」と考える。文字というフィルターのかかったものしか追わなくなってしまった、文字認識を通してから存在を見るようになったとでもいうべき問いである。つまり、文字の普及によって、「これはなんだろう？」というような頭の働きがなくなったということである。利便性に含まれる弊害への警鐘ともいえる。しかし、これは決して文字に対しての問題ではない。文字言語だけでなく、

音声言語で示されるものも含めて、影として考えるべきといえよう。宮田一生氏[18]は、「一定の音と一定の意味とを有たせるものは、何か？」という叙述は、文字言語を問題とした場合、きわめて曖昧である。これは言霊の問題であるとも言えよう。『文字禍』の世界は、その題名からも明白なように、あくまでも文字（文字言語）の問題であって、中島は音声言語と文字言語とを混同してしまったような感じを読者に与えている。」と述べている。文字はその形や組み合わせにより音と意味を示し、音声はその音の組み合わせによって意味を持たせている。言語の発達過程では、文字言語よりも先に音声言語が発達していったのは、周知のことである。中島は、宮田氏のいうように混同したのではなく、文字言語の中に音声言語が包括されるものとして捉えていたのではないだろうか。音声言語のみの環境から、文字言語発達の中途段階として、「文字禍」の舞台が設定されているため、とりたてて文字言語の害を取り上げることにつながったといえるのである。

書物狂の老人の話へと移っていく。この老人は、スメリヤ語やアラメヤ語といった身近な言語だけでなく、埃及語といった他言語にも渡って精通している。しかし、老人の外見は、その勤勉さにより惨めな姿となっている。外見が惨めな姿であるにも拘わらず、「此の老人は、實に――全く羨ましい程――何時も幸福さうに見える。」とある。〈文字禍〉といっても、本人にとって禍と認めなければ、それは幸せなことであると示している。決して、文字の影を追うことが不幸せなことであると、「文字禍」の世界では示していない。エリバ博士は、「文字の靈」を媚薬の如きものと主張している。「文字の靈」の魔力の根拠は全くもってないので、主張への疑念すら憶える。エリバ博士の「文字の靈」が存在するという先入観からの派生は、強引なまでの調査結果を作り出している。

〈文字禍〉への結実は、さらに強引なものへとなっていく。アシュル・バニ・アパル大王が、病気になった時のことを挙げている。西洋医学の発達をまだみない小説時間において、日本でいう祈祷に限りなく近い、死神の目を欺こ

うとしている。それに対する青年の「之は明らかに不合理だ、エレシュキガル神ともあらうものが、あんな子供瞞しの計に欺かれる筈があるか」という考え方に対して、「淺薄な合理主義の一種」としている。エリバ博士の身近で起こることを、安易に「文字の靈」に結び付けている感が否めない。それは、全く疑義を抱かない博士の性格、曖昧なことを短絡的に結論付けてきた結果、エリバ博士の文字の概念を解体させていったことに結びつくのではないだろうか。

四

第二に、イシュディ・ナブ登場以降である「歴史への問いと文字の霊の関わり」を考察する。「文字禍」において、「文字の靈」とはいかなるものであるのかという問題が大きい。それとともに、エリバ博士を通して垣間見ることができる歴史へのアプローチが、作品の支えとなっている。しかし、「文字」と「文字禍」を比較した際、「文字」に比べ、「文字禍」では歴史への問いの記述が大幅に削除されている。「文字」には、文字の問題と歴史の問題という二つの軸が存在するのに対し、「文字禍」では、文字の問題を中心に、歴史の問題は文字の問題を支えるものとなっている。「文字禍」における歴史記述は、いかなるものであるのか。「文字の靈」との関連性を踏まえ、歴史への問いを考察する。

エリバ博士に対して、イシュディ・ナブは次のような質問をする。

> 或日若い歴史家（或ひは宮廷の記録係）のイシュディ・ナブが訪ねて來て老博士に言つた。歴史とは何ぞや？
>
> と。　（三四頁）

エリバ博士に対して、イシュディ・ナブは、「歴史とは何か？」と問う。エリバ博士は、イシュディ・ナブの質問

に対して、呆れ顔をする。エリバ博士の態度、顔色を見たイシュディ・ナブは、続けて次のように質問をする。

歴史とは、昔、在つた事柄を言ふのであらうか？　それとも、粘土板の文字をいふのであらうか？　（三五頁）

イシュディ・ナブは、歴史への疑問を持っている。その解決のために、エリバ博士に問いを投げかけている。エリバ博士は、若い歴史家の熱い思いを、勢いを沈静させるが如く次のように答える。

歴史とは、昔在つた事柄で、且つ粘土板に誌されたものである。この二つは同じことではないか。（三五頁）

さらに、エリバ博士は、次のように説明を付け加える。

文字の精共が、一度或る事柄を捉へて、之を己の姿で現すとなると、その事柄は最早、不滅の生命を得るのぢや。反對に、文字の精の力ある手に觸れなかつたものは、如何なるものも、その存在を失はねばならぬ。（三五～三六頁）

イシュディ・ナブの「歴史とは何か？」という問題提起から、エリバ博士の導き出した「文字の靈」の本質を描いた場面であるといえる。歴史事実がどのようなものなのかという問いを、若輩の稚拙な質問として切り返し、問題視せず、「文字の靈」の本質を提示させる契機として、歴史への問いを利用している。疑義を持たず、短絡的に結論づけてきたエリバ博士は、他人の話に耳を傾けることなどない。自身の研究を振り返ることなく、自説を貫く。イシュディ・ナブとのやりとりは、今まで形成されてきたエリバ像を更に強調する場面となっている。「文字禍」において、歴史への問いは極めて軽視されている。

一方、「ノート第三」に示される草稿段階の「文字」において、「歴史とは何か？」という問いはどのようなものであったのか。「文字禍」の歴史への問いと比べると、その長さは膨大である。[19]

草稿「文字」では、ナブ・アヘ・エリバと新進の史官イシュディ・ナブの他に、王室天文台長ナブ・イクビという

「文字禍」には登場しない三人の問答に、多くの量を割いている。「文字」において、予め「文字の靈」の存在に対する疑義はない。〈文字禍〉の記述が極めて少なく、〈文字禍〉は最終場面における粘土板による圧死と大王からの仕打ちのみである。「文字」において、歴史事実として残るものは、たとえ間違いだとしても、「ナブゥの神のみ心のまに〳〵、文字共は謬りなく残すべきものを残し、亡ぼすべきものを亡すのぢや。」と、神の決定がすべてを決めるものとして、文字のもたらすものがすべてだとしている。また、文字は、ナブゥ神の使い給う妖精として存在するとしている。「文字」は、「文字の靈」に軸を置かず、歴史の方に軸を置いたストーリー展開がなされている。つまり、「文字」は、〈出来事として残るものは、文字として残されたものが真実となる〉ことが、主題となっている。「文字禍」では、「文字の靈」の存在をより確固たるものにすべく、歴史への疑問を〈文字禍〉の一つのように表し、エリバ博士の頑なまでの自己を提示し、「文字」の主題を、消極的にしている。「文字」のように歴史問題を主題にした際、内容の滑稽さや力強さが希薄になってしまうおそれがある。そのことから「文字禍」では、「文字の靈」という発想のもと、エリバ博士の先入観と一人よがり的な行動から導く世界へと転換したのではないだろうか。そして、エリバ博士の盲目的な姿を確固たるものにしてきたのだろう。

歴史の扱いを減らしながらも、「歴史とは何か？」を端的に示すことによって、エリバ博士の言う「文字の靈」の恐ろしさを表現している。書き記すことは自分の意志でなく精霊によってであることまで、エリバ博士は表現している。我々が、「文字の精靈にこき使はれる下僕」であるとし、神や霊には人間というものは勝てないという認識をも思い浮かべさせている。我々は「靈」にかなわぬものである存在であることを、今一度確認している。

ここで今一度、〈文字禍〉について考えていく。「文字禍」世界では、あくまで文字によって受ける禍を中心に描いていることは言うまでもない。しかし、果たしてこの側面だけで中島は〈文字禍〉を使っているのだろうか。

エリバ博士の文字研究が短絡的な研究であることは、今までの考察を通じ明らかである。とすれば、エリバ博士の研究対象となり、害の部分だけを誇張された文字の受けた禍ともいえるだろう。このような視点で「文字禍」をみれば、表面的には文字から受けた〈文字禍〉を描いているが、本質的には文字の受けた〈文字禍〉を描こうとした意図があったといえる。「文字禍」において、「文字」で詳述された歴史への問いの場面が削除されたのは、文字から受けた禍だけを中心に据えたストーリーではなく、文字の受けた禍をも描こうとしたためともいえる。つまり、「文字」から「文字禍」へのタイトルの変更は、「文字禍」として描かんとしたことが明確になったためといえよう。

エリバ博士が、「歴史とは何か？」、〈文字禍〉について熱く語っている。その姿から、「文字の霊の威力を讃美しはせなんだか？」と、文字の霊のすごさを強調している自分自身の姿に気付く。「文字の霊」の存在への疑義を投げかけられた時に始まったエリバ博士の研究は、「文字の霊」が存在する前提で進められている。研究の始まり自体が、「文字の霊」の賛美へとつながっているのである。

五

第三に、「文字禍」の結末である「エリバ博士への文字の霊の禍」を考察する。エリバ博士が「文字の霊」を客観的に追い求めることができないまま、アシュル・バニ・アパル大王に調査結果の報告をする。極めて主観的な調査結果の報告は、エリバ博士の研究の限界を示すものである。そして最後、調査結果を認められないエリバ博士に、奇しくも粘土板が降りかかり圧死する。

結末部分への一途、〈文字禍〉について、見ていく。エリバ博士に次のような奇妙なことが起こる。

今迄一定の意味と音とを有つてゐた筈の字が、忽然と分解して、單なる直線どもの集りになつて了つたことは前

に言つた通りだが、それ以來、それと同じ樣な現象が、文字以外のあらゆるものに就いても起るやうになつた。

（三六〜三七頁）

先述した「文字の霊に関する問題」において既に述べたように、エリバ博士は、文字の概念の崩壊だけでなく、エリバ博士――博士の研究方法ともいえるもの――をも崩壊させていく。「文字禍」の世界で進められたエリバ博士の研究は、あたかも「文字の靈」が存在することが前提である形で命じられ、始まっている。エリバ博士が文字を「意味の無い一つ一つの線の交錯としか見えなくなつて來」た時点で、エリバ博士の中での「文字の靈」の存在論は終結している。「文字の靈」の存在を認めた以降は、文字という概念に執着し囚われているエリバ博士でしかなかったのである。文字の形が意味しているものに対し、意味していることを懐疑することにより、すべてにおいて存在と意味の共有することへの懐疑へと結び付けてしまっているのである。エリバ博士にとって、最早、何もかもが疑わしいものとなってしまう必然が生まれている。意味や音と形との分離というエリバ博士の文字概念の崩壊が、エリバ博士のすべてを変えてしまう結果となっている。

エリバ博士は、自分自身の変化により、早く「文字の靈」に関する研究を纏め上げ、報告せねばならないと思い、急いでアシュル・バニ・アパル大王へ報告する。「文字の靈」に関する報告には、エリバ博士自身の体験を含むような形で、政治的な意見を加えている。草稿「文字」との関係からいえば、草稿「文字」で大きく扱われた政治的な問題の名残を感じさせる。しかし、ナブゥ神を崇拝するアシュル・バニ・アパル大王にとって、その支配下の「文字の靈」が、政治的なものへも関わっているという報告に不満を感じる。アシュル・バニ・アパル大王がナブゥ神を崇拝していることを、エリバ博士は知っているはずである。しかし、エリバ博士は、このような政治的な意見を加えた報告を書かざるを得なかった。これは、「文字の靈」を追い求める過程で、エリバ博士自身が大きく変化してしまった

がゆえだといえるのではないだろうか。

「文字禍」の結末を考察する。エリバ博士の最期は、次のようにある。

大地震の時、博士は、たま〳〵自家の書庫の中にゐた。彼の家は古かつたので、壁が崩れ書架が倒れた。夥しい書籍が――數百枚の重い粘土板が、文字共の凄まじい呪の聲と共に此の讒謗者の上に落ちかゝり、彼は無慙にも壓死した。（三七～三八頁）

エリバ博士は、文字の書かれた粘土板によって圧死する。「文字の霊」という存在に執着し囚われていたエリバ博士が、文字の書かれた粘土板によって、死んでしまう因果の滑稽さが表現されている。エリバ博士の死は、粘土板による圧死であり、自然災害による死であるから、「文字の霊」による死と安易に関連づけ、結びつけて考えていいのだろうか。アパル大王への報告により謹慎させられた際、「文字の霊の復讐」とエリバ博士は捉えている。しかし、このことも主観的であり、言い切れない。とすれば、「文字禍」結末でエリバ博士が圧死してしまうことも、「文字の霊」による禍として捉えられるのか疑わざるを得ない。つまり、結末ではむしろ、エリバ博士に短絡的な文字の霊の報告書を書かれ報告された、文字の霊の受けた〈文字禍〉の意味合いも含まれて描かれているのではないか。そして、追い打ちをかけるように、自然災害によって粘土板が割れ、使い物とならなくなってしまったという文字の受けた禍として結末を描いているのではないか。

畢竟、エリバ博士が「文字の霊」を研究することによって文字概念が解体し、圧死してしまう。いわば「文字の霊」による禍、〈文字禍〉という一面を有しながら、研究対象となり安易な結論を導かれた「文字の霊」の受けた禍、〈文字禍〉という一面の両面を描いたのが「文字禍」なのである。もちろん、「文字禍」におけるエリバ博士の結末を通し、自己の限界と崩壊を受容する困難さを表現し、運命の因果を表現しようと試みたことはいうまでもない。

六

中島敦「文字禍」は、文字の霊による禍と、文字の霊の受けた禍という二つの〈文字禍〉を描いた小説といえる。もちろん、エリバ博士の研究の描写を通じ、自己の限界と崩壊を受容する困難さも表している。〈限界〉と〈崩壊〉という『古譚』を通じて見られるテーマも顕在している。

また、草稿「文字」からの大幅な変更は、文字の受けた禍だけを中心に据えたストーリーではなく、文字の受けた禍をも描こうとした、「文字禍」として描かんとしたことが明確になったためである。「文字」から「文字禍」への題名の変更も、作品の主軸に置くものが変わったのだから、必然であろう。

今までの先行研究においては、文字の霊による禍の一面のみで〈文字禍〉を解されていた。しかし、今まで考察してきたように、エリバ博士によって研究され害の部分をクローズアップされた文字の受けた禍という〈文字禍〉を含め描いた作品が「文字禍」といえるのである。

『古譚』総論における「文字禍」の位置付けの言及は、改めて述べることにする。

註

(1)　深田久彌「中島敦の作品」(『中島敦全集　別巻』／筑摩書房／二〇〇二年五月／一八一～一八七頁)に次のようにある。

『古譚』はシナ及び近東の古い話を題材に採った四つの短篇から成っていた。私はすぐ自信をもって、その傑作を『文学界』に推薦した。当時編集の任であった河上徹太郎君に、もし四つとも掲載不可能なら、そのうちの若干篇でも採用してくれるように頼み、その四つの短篇に私の標準で順番をつけた。たしか『文字禍』を第一席に置いたと記憶する。河上君も『古譚』の価値を認めて、そのうちの二作『山月記』と『文字禍』を取上げて『文学界』に掲載した。

また、「深田久彌書簡1（昭和十七年三月三十一日）」（『中島敦全集　別巻』／筑摩書房／二〇〇二年五月／四七四～四七五頁）に次のようにある。

○「古譚」が文学界二月号に載つたことはもう御承知だらうと思ひます。四篇のうち二篇だけ載せたのは、あの二篇がすぐれてゐたからです。

これらの資料により、『文學界』掲載へのいきさつ、深田久彌が『古譚』四篇のうち「文字禍」と「山月記」がすぐれていたと判断したことがわかる。

（2）佐々木充「「山月記」――存在の深淵――」（『近代の文学・10巻　中島敦の文学』／桜楓社／一九七三年六月／一一〇～一二六頁）

（3）奥野政元「『古譚』の世界――異様な自己」（『中島敦論考』／桜楓社／一九八五年四月／九七～一二三頁）

（4）宮田一生「『文字禍』論」（『日本文藝研究』第四五巻第一号／関西学院大学日本文学会／一九九三年四月／三九～五三頁）

（5）小沢秋広「「問い」の変位、「なぜ」から「どのように」――『文字禍』を中心に」（『中島敦と問い』／河出書房新社／一九九五年六月／六四～八五頁）

（6）秋元誠「「文字禍」小考――存在の必然性への懐疑――」（『富山工業高等専門学校紀要』第三〇巻／富山工業高等専門学校／一九九六年三月／七六～七二頁）

（7）戸塚安津子「『文字禍』考」（『百舌鳥国文』第一三号／大阪女子大学大学院国語国文専攻院生の会／一九九七年一一月／四一～五三頁）

（8）中島甲臣「中島敦論　文字・歴史・歴史記述――「李陵」、「文字禍」を中心として――」（『北海道武蔵女子短期大学紀要』第二九号／一九九七年三月／一～三八頁）

（9）勝又志保「中島敦『文字禍』論――時代を諷するアレゴリー――」（『國文』第九二号／お茶の水女子大学国語国文学会／二〇〇〇年一月／一一六～一二五頁）

（10）安福智行「中島敦「文字禍」論――その成立過程について――」（『京都語文』第七号／佛教大学国語国文学会／二〇〇一年五月／一九二～二〇七頁）

（11）「ノート第三」（『中島敦全集3』／筑摩書房／二〇〇二年二月／二四三～二五六頁）

(12)「ノート第六」(『中島敦全集3』／筑摩書房／二〇〇二年二月／二八一～二九〇頁)

(13) 奴田原諭「相対化の試み――中島敦「文字禍」論――」(『二松』第一六集／二松学舎大学大学院文学研究科／二〇〇二年三月／一五九～一七八頁)

(14) 諸坂成利「中島敦における《翻訳と創作》、あるいは《ボルヘスと中島敦》」(『虎の書跡　中島敦とボルヘス、あるいは換喩文学論』／水声社／二〇〇四年一一月／七九～一七九頁)

(15)「手帳　昭和十六年」(『中島敦全集3』／筑摩書房／二〇〇二年二月／四二九～四五二頁)に次のようにある。

Jastrow, M. The Civilization of Babylonia and Ass. 15.00

(中略)

Olmstead History of A.

中島が『History of Assyria』や『The Civilization of Babylonia and Assyria』といったこれらの書籍について知っていたことがわかる。また、「ノート第三」(前出)や「ノート第六」(前出)の記述内容から、「文字禍」の内容にかかわる記述でこれらの書籍からの記述が見られる。以上のことから、少なからず、「文字禍」の素材としてかかわりのある書籍といえることができるだろう。

(16) 安福智行「中島敦「文字禍」論――その成立過程について――」(前出／一九二～二〇七頁)

(17) 奥野政元「『古譚』の世界――異様な自己」(前出／一二〇頁)

(18) 宮田一生「『文字禍』論」(前出／四二頁)

(19)「ノート第三」(前出／二四七～二四九頁)に次のようにある。引用における、▒は抹消、〔　〕は挿入、［　］は併記を示す。また、XYは、中島自身によって書かれた挿入箇所の指定を示すものである。

「話は全然違ふのですが、私、近頃▒色々と疑を感じて〔迷つて〕ゐることがあるのです。［一寸、御教を乞ひたいことがあるのです。実は私も、］もう、かれこれ、▒十年〔近く〕も歴史を書き、歴史を調べてゐるわけのですが、近頃になつて、どうも段々、歴史といふものが、判らなくなつてくるのですよ。」

天、「歴史が分らない？」

史、「さうです。たとへば、今のお話のバビロン王の最期についても色々な噂があつて、どれにも確かな証據がない。

結局、〔その中の一つを〕大王が、御採用になり、私に命じて書物をお書かせになる。すると結局、それが歴史といふものになるんですね。かういふ筋道を何度も々々繰返して〔ゐる訳だが、〕考へて見ると、どうも判らなくなつてくるんですよ、歴史といふものの正体が。」

老儒者と天文台長とは顔を見合せたる。若い歴史家のいふ事が解せなかつたからである。イシュディ・ナブはあわてゝが説明を加へる。

「自分の迷が自分にもはつきり云へないで、もどかしいと思ひますが、とにかく私の判らないといふのは〔かうなんです。〕歴史つて結局、昔、在つた事柄をいふのでせうか。それとも粘土板の上に誌されたことがら〔だけ〕ものいふのでせうか。」

「そりや昔あつたことがらで、且つ、粘土板に誌されたことがらを言ふのさ、両方同じことぢやないか。君」と呆れた顔をした天文台長が答へた。

〔「イヤ待て〳〵」と年長の賢者が言つた。「その考へ方の中〔君の質問の中〕には何かしら、まちがつた所があるやうだよ。獅子狩と、〔シシ〕狩の浮彫とをごつちやにしてるやうな所が、どうもハツキリは口ではいへぬがね、」ソレニハカマハズ歴史家は、天文家に聞いた。〕

「でも書洩らされたことがらは？」

「書洩らし？　冗談ぢやない。書かれなかつたことは、無かつた（といふ）ことだよ」。

今度は歴史家の方が驚いた。彼の相手の言葉を口の中でゆつくり繰返して見たゐると、天文家は重ねて〔なほ、〕言葉を續ける。

「誤解しちやいけない。何も私は深遠な道理〔逆説など〕をしやべ〔い〕つてゐるのではないよ。ごく〔かんたんな〕当りまへのことをいつてゐるだけです。我々の専門の方にしたつて、同じこと。太古以來の『アヌ・エンリルの書』に書い〔上げられ〕て〔ゐ〕ない星は結局、無い星だといふことですさ。大マルドゥックの星（木星）が参宿『天界の眞の牧羊者』（オリオン）の境を犯せば、神々の怒りが降るといふことも、月輪の上部に蝕が現れれば、アモル人が禍を蒙るといふことも、みな古書にかゝれてあればこそです。さういふ事柄が本当に起るので古書にさう書かれた。それから又、古書にさう書かれたから、さうしたことが起る。この二つは同じことなんだ。大王が斯う書けと言はれる、大王にさういふ

お考が宿つたことが已に神意である。さて、それが書物にしるされゝば、そのことがらは最早動かない。之は一つに〔は〕、文字の神守護者大ナブゥ神の御威徳にもよることだ。ナブゥの愛護を受けなかつた事柄は最早存在を失ふのだ。」

（歴史家がなほも抗議したさうな顔をしてゐると）、

「まだ判らないのかな。君の迷ひはナブゥの神への尊敬信の足りない所から來てをるのではないか。だ。もう迷ふのはやめ給へ。歴史とは〔我々に傳はつた、〕この書物のことなんだ。この文字のことなんだ。」

さし示された粘土板を、ト書風〔歴史家はすつかり、〕相手の勢に壓倒された。歴史家は〔る。彼は〕情けなさゝうな顔付で、さし示された粘土板を見た。〔に目をやつた。〕それはサルゴン王の時代の大〔この国最大の〕歴史家、ナブ・シャリム・シュヌの誌したサルゴン王のハルディヤ征討行の一枚である。さつき彼が口から吐き捨てた柘榴の種子が、その〔表〕面にちらばつて〔汚らしく〕くつゝいてゐる。

側から、ナブ・アヘ・エリバがとりなし顔に口を出す。

「ボルシッパなる〔明知の神〕ナブゥの使ひ姫たる文字の威力を、――イシュディ・ナブよ――君はまだ充分には悟つてはゐなかつた訳ですな。だね。ナブゥ神の使ひ給ふ妖精「文字」共が一度或る事柄を執へて、之を已れの姿で現すとなると、その事柄はもはや、不滅の生命を得るのですぢやよ。〔妖精〕「文字」の妙なる手に觸れなかつたものは、どんなものでも、最早存在をなくさねばならぬのです。〔その際〕「文字」共の選擇に謬りのありやうはないのですぢや。ナブゥの神の明察のに曇のあらう筈の無い限り。ナブゥの神のみ心のまに〳〵、文字共は謬りなく残すべきものを残し、亡ぼすべきものを亡すのですぢや。Ⓧ Ⓨこの靈妙な妖精共の作用はたらきに、貴方君がまだ気づいてゐなかつたとは意外だな。頭脳の明晳を以て聞えた君がね。」Ⓧ君が、〔書物を誌す書く時に、〕自分の意志で以て、筆を運んでゐるのだなどと考へてゐる〔た〕としたら、〔それは、〕とんでもない増上慢ですぞ。Ⓨ君や我々は、彼等妖精に使はれてゐる傭はれ人のやうなものに過ぎぬ。

※「文字禍」本文は、『中島敦全集1』（筑摩書房／二〇〇一年一〇月）によった。本文の引用に際し、ルビは省略した。